

1、「修験道」との出会い～天河大辨財天社から始まる

1984年4月4日に初めて天河大辨財天社に詣でて以来30年、わたしは「修験道」という日本独自の習合文化のありようを感受してきた。天河は古く「吉野熊野中宮」と呼ばれ、修験道の奥駈け道の中軸をなす弥山に奥宮を奉じてきた。その天河大辨財天社は神仏習合文化を保持し修験道の道場となってきた。わたしはこの間に、柿坂宮司や崇敬者の方々と幾たびか弥山登拝し、奥宮での採燈護摩厳修に参列しつつ修験道を間近に感じてきた。

修験道とは、「日本列島の風土の中で発達した、自然として現われ出る神仏への讃仰と身心対話によって、深い叡智（即身成仏智）と力（法力・験力・霊力）を獲得しようと修行する日本独自のユニークな習合宗教文化」である。そこでは、「自然智（じねんち）・身体智の探究、自然智・自然力の獲得」が行を通して実践される。わたしは最近、その修験道の蓄積してきた自然智の文化を「生態学的身体知」と呼ぶようにしている。

その修験の聖地の特色は、まずブナ林があることである。もちろん、天河大弁財天社の鎮座する弥山にもある。森のマドンナと呼ばれるブナは保水能力があり、ドングリを稔らせるので、そこには豊かで清らかでおいしい水が流れ、多様な植生と動物が生息し、海もまた豊かである。

ブナ、ナラ、ダケカンバなどの広葉樹林を持つ山並みは、新緑・紅葉ともに変化があって美しく透明感が漂う。ブナ林帯にはツキノワグマやニホンカモシカなどの中大型の哺乳類や、イヌワシ、クマゲラ、クマタカなどの鳥類や、何千種もの昆虫類が棲息し、豊かな食物連鎖網を築き上げている。

その上、急峻な谷間には、清らかな水で禊や滝行ができる浄めの場所があり、聖域となっている。また、修験の山々は法螺貝が鳴り響く天然のエコー空間で、音を通して、カミヤホトケと感応道交しやすい霊的次元回路・立体交差路となっている。

わたしは、天河・弥山を基点として、伯耆大山、日光男体山、白山、戸隠山、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）、英彦山など修験の山々を歩行し、地元の比叡山は250回以上上り下りし、回峰行の拠点である無動寺の弁天堂もしょっちゅう歩いてお参りしている。

そのような古道の歩行を通して、最近では高野山と天河をつなぐ古道を歩行したいと強く思うようになった。この秋にもぜひ実行し、それを毎年の定例行事にしていきたいと考えている。

自然を畏怖し、讃仰する。「身一つ」になることで、おのれの「身の丈」を思い知り、この「身一つ」で何ができ、できないかをはっきりと掴むことで、自然界の中の人間の位置、自己の位置を知り、謙虚に生きてゆく。

そんな身体知・自然知を身に受け止めつつ、東山修験道や天河―高野山古道歩行の道行きを辿っていきたい。（わたし自身の東山修験道の発見と開発の日々の記録「東山修験道日記」は、科研「モノ学・感覚価値研究会」のホームページ（<http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/>）の「研究問答」欄に掲載）

2、比叡山延暦寺のHPから公式説明を検討する

「修行」～「総論」「千日回峰行」「十二年籠山行」「四種三昧」「在家の修行」の四項

「総論」～「天台宗は法華一乗の思想ですべての仏教を包含しているので、その修行の種類は多様です。天台の教えに基づく止観をはじめ、伝教大師の心を受け継ぐ十二年籠山行、密教の修法、峰々を巡る回峰行、阿弥陀仏を念ずる常行三昧など、仏教の様々な修行が行なわれています。ここでは、代表的な修行と、在家の方の修行ガイドを記します。」～「修行」の根底に「法華一乗思想」がある。

1)「千日回峰行」～「相応和尚により開創された回峰行は、文字どおり、比叡山の峰々をぬうように巡って礼拝する修行です。／この行は法華経中の常不軽菩薩の精神を具現化したものともいわれます。常不軽菩薩は、出会う人々すべての仏性を礼拝されました。回峰行はこの精神を受け継ぎ、山川草木ことごとくに仏性を見だし、礼拝するものです。／回峰行者は、頭には未開の蓮華をかたどった桧笠をいただき、生死を離れた白装束をまとい、八葉蓮華の草鞋をはき、腰には死出紐と降魔の剣をもつ姿をしています。生身の不動明王の表現とも、また、行

が半ばで挫折するときは自ら生命を断つという厳しさを示す死装束ともいわれます。／千日回峰行は7年間かけて行なわれます。1年目から3年目までは、1日に30キロの行程を毎年100日間行じます。定められた礼拝の場所は260箇所以上もあります。4年目と5年目は、同じく30キロをそれぞれ200日。ここまでの700日を満じて、9日間の断食・断水・不眠・不臥の“堂入り”に入り、不動真言を唱えつづけます。／6年目は、これまでの行程に京都の赤山禅院への往復が加わり、1日約60キロの行程を100日。7年目は200日を巡ります。前半の100日間は“京都大廻り”と呼ばれ、比叡山山中の他、赤山禅院から京都市内を巡礼し、全行程は84キロにもおよびます。最後の100日間は、もとどおり比叡山山中30キロをめぐり満行となるものです。」

2)「十二年籠山行」～「籠山行は伝教大師の時代より始まりますが、現在のように大師の御廟である浄土院で生身の大師に仕えて奉仕する“侍真”の職を勤めるようになったのは、元禄年間からです。／現行の籠山行に入るためには、まず好相行という礼拝行を行なわなければなりません。この行は、仏が現れるなどの好相を感得するまで続けられ、その後戒壇院にて戒を受けます。ここで初めて籠山比丘となり、12年間の山修山学に入ります。／籠山僧は、伝教大師に食事を献ずるなどの日課のほか、坐禅や勉学、境内や道場内の清掃に明け暮れ、うつろい激しい世間の流れから離れて、一日一日を生きるのであります。」～籠山行は『山家学生式』に記された天台宗のもっとも基本的な行。

3)「四種三昧」～「四種三昧は、比叡山で最も歴史の古い、基本的な修行です。中国の天台大師による『摩訶止観』に基づく修行で、常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧の四種です。／常坐三昧は、静寂な堂内に一人で入堂し、坐禅に没頭します。2度の食事と用便以外はもっぱら坐り続けます。／常行三昧は、念仏をとえながら、本尊阿弥陀仏の周囲をまわり続けます。堂内の柱間にしつらえた横木を頼りに歩いたり、天井からつり下げられた麻紐につかまって歩を休めることはできますが、決して坐臥しません。／半行半坐三昧には、方等三昧と法華三昧があり、比叡山では法華三昧が行なわれています。五体投地や法華経の読誦からなり、歩いたり坐ったりしながら行をすることからこの名があります。／非行非坐三昧は、毎日の生活そのものが修行となります。期間や行法が定まっていないので、かたちを超えた本質に通じなければならず、必ずしも容易とはいえません。」

4)「在家の修行」～坐禅や写経や作務や諸種の研修プログラム。このような「在家の修行」という観点からみると、わたしたちの企画した科研の「大荒行シンポジウム」もまた「在家の『研修的な』修行」といえると思う。

3、河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新書、朝日新聞社、2008年

第三章 壮大な旅を支える異郷の神 | 赤山禅院

京都は山が深い。東には東山三十六峰が、北には鞍馬山や花背など奥深い北山の原生林が、西には愛宕山などの連峰が控え、母が子どもを優しく抱くように京都の街並みを取り巻いている。

この典型的な盆地形状は、平安京遷都（延暦十三年〈七九四年〉）の昔から「四神相応」の吉祥地と考えられた。東に川（賀茂川・鴨川）があって青龍が守り、南は開けて池（神泉苑や巨椋池）や田があって朱雀が守り、西には大道（山陰道）があって白虎が守り、北には山（北山や丹波高原）があって玄武（蛇と亀とが合体した霊獣）が守るという鉄壁の天然の布陣を持つ地形とされた。

その中で北東の方角は「鬼門」の方角として恐れられたが、その鬼門に位置するのが赤山禅院と比叡山延暦寺である。そこは「皇城鎮護」の地とされて、仏教による平安京守護の最重要拠点とされた。それゆえに、京都の「癒しの道」を考えようとするなら、この鬼門の方角を護る寺院とされてきた比叡山延暦寺と赤山禅院をはずすことはできないだろう。

叡山電鉄の修学院駅で下車し、北東の方角に二十分ほど歩いていくと、大きな石鳥居が見えてくる。鳥居があるから神社かなと思って中に入っていくと、立派な山門があって、右の戸に「天台宗修験道総本山管領所」と大きな看板がかかっている。驚かされる。「ここは、神社なの？ それともお寺なの？」と。

もちろんそこはお寺で、「赤山禅院」の「禅院」は、古くから「寺院」の別称として用いられてきた。だが、ここは普通の「寺院＝禅院」ではない。

参道を歩いていくと、左側に建物が見えてくる。その屋根の上に左手に鈴、右手に御幣を持った猿が置かれている。これは何かと思って近づいていくと、そこから奥の方を拝することができるようになっていたが、どうもここは拝む場所ではあっても、本尊や仏像を安置した「お堂」ではないようだ。そこで、矢印の立看板に沿って左の方に回りこんで奥に進むと、本堂とおぼしき建物の前には、巨大な念珠の輪があって、参拝者は全員そこを潜らなければ中に入っていけない。

説明書きを読むと、これは「正念誦（正念珠）」であるとされ、密教の修法の中でもきわめて重要なものと書かれていた。さらに読み進めると、この修法を修する行者は本尊と直ちに感応・相応して一体となり、まことの心眼を開くことができるとある。そして最後の方に、すべての邪念を去って、「我とご本尊とは一体なり」と観想しつつ、一心に本尊の赤山明神の真言「オンサルバンチケイビシュダラニソワカ」を念誦するとあった。

「赤山明神」、それがここに祀られている「神」である。しかし同時に「ご本尊」であり、真言が誦される。何なんだ、この神様＝ご本尊さんは！ とさらに疑問は膨らむ。

赤山明神の建物は、本堂というよりも本殿というべき神社形式の高床式で、その床の高さは優に二メートル五〇センチはあるだろう。とすれば、その前方にあった建物は拝殿、すなわち神様を祀る本殿に対して参拝に訪れた人々が礼拝する拝所としての拝殿ということになる。「お寺で、神社形式かあ～？ ううむ？」とまたまたいぶかしく思いながら左脇から出ると、そこに地藏堂があり、その裏には弁天堂があった。

さらに右手奥に回りこむと、京都七福神の一つの福祿寿堂がある。さらにその奥（東側・右手）には金神社があり、その手前には一本の木から三本の木に幹分かれしている樹木があってそこに相生宮が置かれている。

「ううむ、ううむ、この複雑多様な神様仏様の寄り合い所帯はいったい何なんだ？」と疑問はさらに深まり、最初の拝殿の方に戻ろうとすると、道の右手に二本の滝のある御瀧求堂があるのが見えた。「滝か！」。ここでは滝行修行ができるようになっていて、護摩壇もある。またその左側には不動堂があって、ここでも護摩を焚いて祈ることができる。

そして境内参拝一周して元に戻る手前の不動堂の前に、「還念珠」の大きな輪が置かれていて、すべての参拝者は帰りにはこの念珠の輪を潜らなければならない。そこに、「正念誦（正念珠）」の願文が書かれていた。漢文と書き下しの両方が書かれていたが、それは、「願わくば我が念誦により生ずるところの福をもって、本尊の智慧の海、平等一味の同法性に入りたてまつり、我れも衆生も共に仏とならんことを」という内容であった。

なるほど、こうして仏道成就を願いつつ、祈りを深め、守護を得るのかと思ったものの、この赤山禅院というお寺がどんなお寺であるか、この地を一周しただけではよくわからない。この不思議な寺院の特殊で特別な位置づけを知るためには、まず比叡山延暦寺の縁起とその背景から理解しなければならないだろう。

「国宝」を育てる山

二〇〇六年十二月二十三日、わたしは初めて比叡山に徒歩で登った。麓にはまだ紅葉が残っていたが、途中からは前日に降った雪が残っていて、山上は一面の銀世界だった。

延暦寺の中核をなす根本中堂に入ると、そこは深い闇に包まれ、内陣奥にボーッと浮かび上がるように、本尊の薬師如来を安置する厨子が置かれていた。そこはまるで、漆黒の宇宙空間に浮かぶ青い地球のようで、これまで国内外のいろいろな聖地や宗教施設を数多く訪れてきたが、この根本中堂内陣はわたしが見てきた中で最高に美しく静謐な神秘空間だと思えた。闇と光との絶妙のコントラスト。

「一隅を照らす」とは延暦寺の開祖・最澄の『山家学生式』の中での言葉だが、わたしはこの堂内に、確かに、「一隅を照らす」最澄の願が空間デザインされていると感じた。そしてそこに、宇宙と四次元的深遠と靈性を強烈に感じとった。「この空間を演出した人は、実に見事な空間感覚、デザイン感覚を持っているな」と感じ入っ

たのである。とりわけ、この「闇」や「影」の妙味に、幽玄をすら感じとった。

実は、この根本中堂は最澄の設計になるものではない。元亀二（一五七一）年九月の織田信長による比叡山焼き討ちの後、焦土と化していた比叡山は、徳川第三代将軍家光によって再興され、延暦寺の中核を成す堂宇として「根本中堂」が寛永十九（一六四二）年に再建寄進された。

再建チームの総合プロデューサーは天台宗中興の祖の一人、天海大僧正であった。天海は徳川家康・秀忠・家光の三代の将軍に仕えた政僧で、東照宮創建プロジェクトを企画立案実行した中心人物である。ちなみに、羽黒山執行で別当職を務めた天宥が、羽黒一山をそれまでの真言宗から天台宗に宗旨替えしたのも、東叡山寛永寺のトップであった天海傘下の威を借りるためであり、これにより東北修験の根拠地であった羽黒修験道は天台修験の軍門に下った。

根本中堂は、現在国宝に指定されているが、この「国宝」という言葉をもっとも早く使用したのが、日本天台宗の本拠地としての延暦寺（延暦七〈七八八〉年の創建時は「一乗止観院」と呼ばれた）を創始した最澄であった。最澄は『山家学生式』の中で、「国宝何物 宝道心也 有道心人 名為国宝……照干一隅 此則国宝（国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす……一隅を照らす、此れ則ち国宝なり）」と宣言した。

つまり、「道心」こそが「宝」で、その「道心」を持って「一隅を照らす」生き方をする人こそが「国宝」だと宣言したのである。そして「道心」を持って、十二年もの間、山にとどまり一心不乱に修行することを「国宝」への道と義務づけた。この教育方針が後に栄西や法然、親鸞、道元、日蓮などの鎌倉新仏教の創始者たちをはじめとする、一隅を照らす「国宝」を育て、それによって比叡山延暦寺は世界に冠たる道心と学道の府となっていたのである。

もちろん比叡山は時代の趨勢の中で僧兵を擁し、朝廷権力と結託し、権力闘争に耽り、僧侶集団としての腐敗や墮落も見られたが、同時にそれを内部から批判し、突き抜けていく自浄力をも生み出したわけである。

最澄は南都仏教に抗して比叡山に大乘戒壇を造ろうと奔走したが、生前、それを実現することが叶わなかった。しかし、最澄の死後すぐの七日後に、勅許により比叡山に大乘戒壇が設けられることになる。それが今の戒壇院の基である。

東大寺や東寺（教王護国寺）のような都の中の巨大寺院ではなく、山中にあって里を見護り、平安京を守護する鬼門の地を日本天台宗の「国宝」育成の修行の地に選んだ最澄の地政学的センスは抜群であったと言える。そしてこの比叡山での仏道修行は、天台（法華）ばかりではなく、密教（台密）、禅、戒律の四門で、また法華（法華堂）と念仏（常行堂）が共存するという幅の広い学道であった。そこから、時代の新しい地平と宗教意識を切り開く世直し・心直し仏教を産出せしめたのである。

わたしはこの宇宙空間を想起させる「国宝」根本中堂内陣の前で「般若心経」三巻を唱え、法螺貝と横笛を奉奏し、その後、雪の中をずくずくになりながら山を下り、帰りがけに平安京の「表鬼門」とされる赤山禅院（赤山明神）を参拝した。

夕方の五時を回りかけていて、あたりはすっぱりと夕闇に包まれていたため、このときは境内を回らず、拝殿の前で、聖地や寺社参拝の際には必ず持参する法螺貝を奉奏し、「般若心経」を奉唱して帰ろうとしたとき、お坊さんが出てきて、山形県の銘酒「辯天」の一升瓶のお下がりをお願いした。そのとき、心の一隅にポッと灯りが射すような暖かさを感じた。それがわたしと赤山禅院（赤山明神）との出逢いだった。

平安京の「生態智」

三日後の昼、わたしは独りで赤山禅院に出かけ、この地が千日回峰行の重要拠点であり、天台修験道の拠点の一つともなっている延暦寺の別院で、「皇城表鬼門」と称されていることを確認し、改めてこの地が極めて呪術的で、かつまたたいへん不思議なところだという思いを深くしたのだった。

境内の地藏堂や弁天堂も実に深々と祈りこまれていて、生きており、地藏菩薩の仏像が振動しているように感じた。そして、「さすがに叡山の表鬼門とされるだけあってパワフルやなあ」とひとりごちたのだった。

赤山禅院は、京都市左京区修学院にある。今では修学院離宮が人気スポットとなり、観光地として有名であるが、江戸時代に第一〇八代後水尾天皇のために造られたのが修学院離宮で、かつてそこは赤山禅院の境内地であったという。この後水尾天皇の在位（慶長十六～寛永六〈一六〇一～二九〉年）期間もまた天海が活躍した時代である。天海がきっと関与していただろうと思う。

本尊として祀られている赤山明神は道教の神・泰山府君で、冥界守護の神とも「閻魔大王」ともされ、天台宗では、第三代天台座主円仁が入唐求法の際に守護を得た靈験あらたかな神と位置づけられている。この異貌の道教神を厚く信奉した円仁の遺言で、弟子の安慧（第四代天台座主）により仁和四（八八八）年に建立されたのが赤山禅院であるという。とすれば、この円仁の遺訓は日本天台宗のみならず、平安京をも見護ることになった。こののち赤山禅院は霊的守護、霊的国防の砦として機能していったからである。ちなみに、京都の夏の風物詩として知られる大文字の送り火は、慈覚大師円仁の遺徳を偲ぶ行事であるとも言われている。

そもそも「平安京」は最初、不安と腐敗の極まった平城京から長岡京に遷都した桓武天皇がその地にも安住できずに四神相応の霊地として急遽遷都された俄か造りの都であった。その都が千年を越す長期にわたって都となり、多彩な日本文化の創出の母胎となるとは桓武天皇も夢にだに思わなかったことだろう。

だが、京都は平安京として延暦十三（七九四）年から慶応四（一八六八）年まで日本史の中でもっとも長く都が置かれることになった。なぜ平安京は千年以上もの長い間都たりえたのか。京都の「癒しの道」は、平安京という長期にわたる都の中で醸成されてきた文化である。そこでまず平安京長寿の秘密を解明しなければならないだろう。

わたしは、平安京長寿の秘密の一つを「生態智」にあったと考えているが、その「平安京生態智」とは、・水の都、・祈りの都、・芸術・技芸・ものづくり文化の都、・里山盆地の都、という四つの属性を持っている。

まず第一に、平安京は東の賀茂川、西の桂川を両サイドに持ち、地下にも地上にも豊富な水系を張り巡らし、保有している。それが水の都としての平安京のライフラインの基盤である。伏見の酒造りや染色などもその豊富で清らかな水の賜物であった。その水と土に支えられた生態系が平安京安定の土台であった。

第二に、その生態系的基盤の上に、皇城鎮護の寺としての比叡山延暦寺（近江国〈滋賀県〉側）や赤山禅院（山城国〈京都府南部〉側）という「表鬼門」の守りを持ち、東を流れる賀茂川水系に賀茂一族による上賀茂・下鴨神社、西を流れる桂川水系に沿って発展してきた秦一族による稻荷神社や松尾神社、広隆寺ががっちりと平安京を支えた。その神仏協働による祈りの都としての平安京の「癒し空間」の創出。

中でも、両賀茂社は天皇や貴族と結びついて絢爛たる葵祭を実施し、稻荷神社や松尾神社は庶民信仰と結びつき、商売繁盛や酒の醸造を支えた。平安京においては神仏つまり神社仏閣が協働して霊的守護を施すことによって、一定の安定構造を作り上げたのである。

ここで重要なことは、祈りの都としての平安京においては、大きな社寺だけでなく、辻々のお地藏さまや観音さまなどの小さなほこらが日常的な生活空間の中の「癒し空間」や安らぎの場、祈りの場として、大変重要な意味と社会的機能を持っていた点だ。生活に根ざした農民や町衆の祈りや祭りが社会安定に大きな役割を果たしていたのである。

延暦寺や赤山禅院や賀茂神社や松尾神社は、都城建設において皇城守護の拠点の役割を果たし、辻々のお地藏さまや観音さまやお稲荷さんは庶民の生活文化に潤いと彩りと安らぎを与えた。

第三に、いろいろな浮き沈みや紆余曲折はあったものの、長期にわたり安定を保持することのできた平安京は、一定の生産力やネットワークに支えられてさまざまな芸能や芸術や工芸などのものづくり文化を醸成させた。「禁裏御用達」（天皇家御用達、後に宮内庁御用達となる）はそれを支えた一制度であり文化であった。それが

ものづくりの都としての平安京である。

第四に、平安京は周囲の山並みを里山とし、農業や林業はもちろんのこと、その里山を祈りや祭りやものづくりと連動させ、周辺地域との一大里山盆地文化圏を造り、マツタケづくりなどを含め、類稀なる総合生産力を安定的に供給できる文化創造都市を形成していった。それが里山盆地文化としての都である。

平安京を都として千年以上にわたり維持するためには、堅固な・物質的基盤（水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、ヒトの流れ）、・技術的基盤（芸術、技芸、学問）、・精神的基盤（宗教、象徴性、呪術性、霊性）がなくてはならず、「癒し空間」はその第三領域の重要要素としてあった。

こうして、平安京を守護する霊的装置としての赤山禪院は、仁和四（八八八）年に建立され、御神体の赤山明神は毘沙門天に似た武将を象る神像で延命富貴の神とされて信仰され、都の「表鬼門」に当たるために、方除けの神としても崇敬されたのである。

面白いのは、皇城守護が同時に集金守護ともなっている庶民性だ。いつの頃からか「赤山さんは掛け寄せ（集金）の神さんや」と評判になり、赤山明神の祭日の「五日講ご縁日」に参詣して掛け取り（集金）に回るとよく集金できるとされて、町衆の信仰を集め、一般に「五日払い」といわれる商習慣ができ、現在の「五十日」につながっている。

すべての衆生が成仏する

さて、本殿入り口の巨大な念珠の輪は結界ともなっており、入ってくるものを圧するかのように、また弁別するかのように、境界を守護すると同時に仕切っている。その圧力は相当なものだ。赤山禪院を象徴するものはこの「念珠の輪」であろう。祈りと仏力・神力によって門を守り防ぐという気概と呪性がみなぎっている。また本殿も高床式ですつくと聳え立ち、たいへん力強く勇壮な雰囲気を漂わせている。

日本天台宗は法華経ばかりではなく、台密と呼ばれる天台密教を内包しているが、その密教はこの赤山明神や三井寺の新羅明神などの道教的要素や、天台宗の儀式である玄旨帰命壇の本尊で念仏の守護神とされる摩多羅神などの怪異な異神を多々含んでいる。空海によって体系的に整序された真言密教とは異なるカオティックな密教が天台密教の特徴だともいえる。二月末に行われる三千院の星供法要なども、天台密教の醍醐味を伝えてくれる密教儀式である。赤山明神はそうした天台密教の「密」の部分をしたたかに支えている。

拝殿中央の屋根の上の、御幣と鈴を持った陶製の猿の像は、魔除けや悪霊封じの意味も持ち、御所の東北角の猿ヶ辻の猿と対応しているとされる。猿は鬼門の神・金神の表象とも、また日吉大社の神使ともされていて、比叡山とは縁が深い動物である。

天台密教はいつしか「草木国土悉皆成仏」を謳い上げ、衆生すなわち生命あるものは、みなすべからく悟りを開いているという天台本覚思想を主張するようになった。それは空海が提唱した「即身成仏」論よりもさらに徹底した成仏論で、その起源は最澄の法華一乗論にある。

最澄は、南都六宗の一つである法相宗の僧・徳一と三一権実論争をたたかわせたが、これは成仏（悟りを開き、仏に成ること）をめぐる考え方の対立であった。徳一は成仏は菩薩乗と縁覚乗と声聞乗の三乗に帰着するという「三乗真実」を主張した。つまり、誰もが悟りを開いて成仏できるわけではないという考え方である。それに対して、最澄は、すべてに仏性ありとする「悉有仏性」観に基づき、誰もが成仏できると説く「一乗成仏」の道を強調して反論した。つまりすべての生命あるものが法華経という一つの乗り物によって成仏・成道に至るという思想と立場である。

すべての衆生が成仏する。その絶対平等性を仏の慈悲の現れとして、仏性の本質顕現として最大限に発展させたのが、天台本覚論という日本天台宗から内発的に出てきた思想であった。一切の衆生が成仏できるとする（また、しているとする）天台本覚思想は、苦の現実（一切皆苦）を見据え、悟りの智慧によってそこからの解脱をはかる、仏教本来の実践と教えからの墮落と批判されることも多い。苦悩する現実との厳しい緊張を失い、素朴

な現実肯定や修行不要論なども生み出しかねないこのパラドキシカルな仏教思想は、徳一との論争において、すでに最澄の成仏論によって種を撒かれていたと言える。もちろん、最澄は十二年間の籠山行の生みの親であり、厳しい修行や学道を奨励し一隅を照らす「国宝」育成に生涯をかけた人である。その最澄から発した天台思想に胚胎した本覚思想を通奏低音として、親鸞の自然法爾論や道元の只管打坐論が生まれてきたのだ。そうした後世の「国宝」的思想と道心の種子を、比叡山深くに最澄は植え込んだのである。

かくして、赤山明神の拝殿中央に置かれた猿の後ろには、そのような天台本覚思想という仏性の森が控えているのである。

千日回峰行と「陰」の力

衆生は本来悟っているのだから修行なぞする必要がない、という論理と主張が天台本覚思想からは出てくる。しかし、比叡山では円仁の弟子の相応の時代から回峰行が始まったとする。この日本仏教最大の難行苦行である千日回峰行を生み出したのも比叡山天台宗であり、その根拠地となった近江側の無動寺に対して、山城側すなわち平安京側の根拠地となっていたのがこの赤山禅院である。

そもそも日本天台宗草創期に活躍した最澄、義真（初代天台座主）、円澄（第二代座主）、円仁（第三代座主）、安慧（第四代座主）、円珍（第五代座主）はみな学問僧にして同時に苛烈な修行僧であった。中でも円仁は、遣唐使の一員として二度も入唐（中国留学）に失敗し、それにも負けず、三度目にしてようやく五台山や長安への留学を果たした筋金入りの修行僧であった。延暦十三（七九四）年、平安時代の開始とともに下野国（栃木県）の都賀郡に豪族壬生氏の子として生まれた、平安の世の申し子ともいえる僧が円仁であった。九歳で大慈寺に入って修行し、十五歳のとき、最澄が唐より戻り、比叡山に修行道場の一乗止観院を中心とした日本天台宗を開いたと聞きつけるや、叡山に駆けつけ、最澄の弟子となり、学行に励んだ。

承和五（八三八）年、最後の遣唐使船の一員として、三度目の渡航でやっと入唐求法の夢が叶った。円仁は師・最澄が学んだ天台山行きを望んだが、許可が下りなかったので、不法滞在者として残留し、山東半島の赤山浦の赤山法華院の新羅僧の勧めもあって、五台山まで六十八日間をかけ、正味四十一日で一三〇〇キロ近くを歩きぬいた。長途の果てに五台山の中台の頂を望み見たときのことを『入唐求法巡礼行記』に、「地に伏して遙かに礼し、覚え涙を雨らす」と感極まったかのように書き記している。円仁はその五台山で法華教学と密教とを修め、南台山中でブロッケン現象と思われる「聖灯」を目撃する。五台山からさらに一一〇〇キロを歩いて長安に赴き、改めて密教を学び、金剛界・胎藏界の灌頂を受けたが、時の皇帝武宗（左位八四〇～八四六年）による廃仏に伴う外国人僧の国外追放にあい、ふたたび二カ月近くかけて赤山浦に戻り、新羅人の助けによって九年余に及ぶ困難極まりない入唐求法の旅を終えて帰国したという。

この間の旅の詳細な記録が『入唐求法巡礼行記』である。円仁は多いときには一日ほぼ四〇キロ近く歩いたようである。そして帰国後、入唐求法の成満を導き帰国の際に守護してくれた神・赤山明神を日本天台宗および平安京守護の神として厚く祀ろうとしたが、自分の代では果たすことができず、次の第四代天台座主安慧の代になってようやく建立されたのが赤山禅院であるとされる。

だが不思議なことに、円仁の『入唐求法巡礼行記』には赤山明神のことが記されていない。そこで、寺門派と呼ばれるようになる三井寺（園城寺）に祀られていた新羅明神に対抗して、山門派の拠点として赤山明神が祀られるようになったとも考えられている。

このような天台宗内部の勢力争いはともかくとして、比叡山の千日回峰行は、この円仁の入唐求法の「歩行」をもどき、追体験する修行であったとも言えよう。なぜなら、円仁の弟子の相応によってこの回峰行が始まったと伝えられるからである。師の苦難の旅や五台山巡礼に思いを馳せ、神仏に祈りを捧げながら比叡の山並みを抜けてゆく。

この行は、『法華経』に描かれた、すべての衆生に仏性を見出して礼拝した常不軽菩薩の精神を体現する日本

天台宗独自の修行とされる。ちなみに、宮沢賢治は常不輕菩薩に魅かれ、「虔十公園林」の虔十や「雨ニモマケズ」のデクノボーには、その常不輕菩薩の精神が脈打っている。生きとし生けるものすべてに仏性を見出すまなざしと心を、この菩薩は体現していたのである。

千日回峰行は、百日回峰を終えた者の中で特別に発願し認められた行者が、まず最初の三年間は一年に百日間ずつ(通算三百日)定められた二百六十カ所ほどの拝所を一日三〇キロのペースで回峰する。四年目と五年目は、一日三〇キロを二百日間ずつ(通算七百日)回峰する。こうして、五年間で通算七百日間の回峰の行を終えた行者は、東に琵琶湖を見渡せる眺めのよい比叡山中無動寺谷の明王堂で「堂入り」と呼ばれる凄絶な行を行う。九日間にわたり断食・断水を取行する籠りの行である。しかもその間、不眠・不臥で、間断なく不動明王の真言を十万回唱える荒行中の荒行である。

そして六年目、「堂入り」を終えて「行満阿闍梨」を名乗ることを許された回峰行者が、比叡山から雲母坂を通ってここ赤山禅院(赤山明神)にお参りして献花するのが「赤山苦行」と称する百日荒行の段階である。一日三〇キロに、さらに赤山禅院への往復が加わった、一日六〇キロの行程を百日間回峰する。これで通算八百日である。

七年目は、前半の百日間は、赤山禅院からさらに京都市内を巡礼する一日八四キロの「京都大廻り」の回峰を行じ、後半の最後の百日間で最初の一〇三〇キロの行程を巡る。これで千日におよぶ回峰行が完結する。

その千日回峰行者の六年目の「赤山苦行」の際に、赤山禅院入り口の石鳥居のそばにある鳥居本家が、回峰行者への供養として食事を出しているという。

ある日、その鳥居本家を河合俊雄さんとともに訪ねた。すると、京都ノートルダム女子大学人間文化学部教授で『精進料理と日本人』や『平安朝のファッション文化』を出している鳥居本幸代先生が出てこられて、玄関口の欄間に収められた回峰行者の書いたたくさんの御札について説明してくださった。

鳥居本さんは「今年のお接待はもう終わりました」と言っていた。二〇〇七年十月二十一日、千日回峰行者・星野圓道師(当時。現在は光永圓道師を名乗る。延暦寺大乘院住職)の「堂入り」が満行となった。戦後十二人目であった。その光永圓道師にとって、今年、二〇〇八年が「赤山苦行」の年だったのだ。「お接待」とは、光永圓道師への食事供養だったのだな、としみじみ納得したのであった。

鳥居本さんが精進料理の研究に参入していった背景が見える気がした。回峰行者の「赤山苦行」に際して生命力を賦活する料理を「供養」として作り続け、平安朝の食やファッションをみずから研究するようになった鳥居本さんの中に、かつて柳田國男が指摘した「妹の力」を見る思いだった。

こうして、往古の円仁や相応時代のことから、現代の回峰行者のことまでを思い浮かべながら、河合さんとわたしは赤山禅院一帯を歩いたのである。

現在、赤山禅院境内には、松や楓がたくさん植わっていて、秋には紅葉の名所として多くの人が訪れる。が、修学院離宮はよく知られていても、この赤山禅院まで知る人は、京都人以外だと意外に少ない。が、ここが平安京にとってどれほど重要な「行の道」であり、「癒し空間」でありつづけたか、よくよく知る必要があるだろう。

「都七福神」の一神の福祿寿をも祀るこの赤山禅院で感じるのは、福祿寿とは対極にあるような「陰」「隠」あるいは「影」のエネルギーである。古代よりもっとも恐れられた鬼門の位置とは陰の極まる時空間であり、それが畏怖と崇拝の拠点となった。そこをどのように護り維持するかが、全体の維持に大きく作用するというコスモロジカルな象徴思考がはたらいていたのだ。

その陰の地に大きな念珠の輪を置き、入ってくる人を受け入れると同時にチェックする。この念珠のパワーはなかなかのものだ。往路の本殿前と帰路の不動堂前の二カ所にその大念珠輪が置かれているわけだが、赤山明神と不動明王(扉の写真)がタッグを組んで、しっかりとこの地を護っているさまが髣髴される。

この不動堂の脇に二本の滝が流れている。あるとき、ここで滝行ができるかどうか聞いてみたところ、今は多

く修学旅行の高校生の水行を受け付けているという。申し込みがあったときには許可しているのだそうだ。修学旅行の高校生の中に滝行を体験したいという若者がいるのだ。携帯を持ち、茶髪にした現代の高校生の中にも滝に打たれて修行してみたいと思う若者がいるのだ。そんな若者の中から次の回峰行者が出てくるだろうか。最澄や円仁や相応が希求した道心ある「国宝」が出てくるのを、この赤山禅院は千年の時を超えて待ち続けているのである。

4、明王院（「月刊京都」連載 61 回目「葛川息障明王院と千日回峰行」志和川書院）

京都に来て十一年。東山修験道を始めて七年。この間、わたしの中でもっとも変わったのが比叡山に対する関心と敬愛である。毎朝、比叡山を御神体として三〇分ほど朝のお勤めを行なう。もちろん、祝詞や般若心経や石笛・横笛・法螺貝の三種の神器の奉奏も含めて。

比叡山に対する敬愛と関心が、一乗止観院（延暦寺）を開いた伝教大師最澄に対する関心と敬愛につながり、また千日回峰行を始めた相応和尚に対する敬愛と関心につながってきた。

そんなこんなで、念願が叶って、千日回峰行の奥の院とも拠点ともいえる葛川息障明王院を訪ねることができたのは、お盆前の八月三日とお盆明けの一八日のことであった。そのどちらも、わが行ずる東山修験道の修行の一環という思いで行なった。

八月三日、朝八時半に一乗寺の砦から沐浴庵の鍼灸師小林さんの車で明王院に向かった。六〇肩の痛みには耐えかねて小林さんの鍼灸治療を受けるようになってから一年以上が経つ。おかげさまで八割方回復したが、まだ鈍い痛みが残っている。

車で一時間ほどで大津市坊村の明王院に到着。明王院は、天台千日回峰行の本拠地である奥之院の聖地・霊場だ。その葛川^{かつらがわ}息障明王院へ入る三宝橋を渡る手前に、地主神社があった。京都の清水寺の隣にも地主神社がある。土地のヌシの神様を祀る神社だ。祭神は国常立尊と地主神の思古淵明神^{しこぶちみょうじん}。この「思古淵」の神は、安曇川^{あどがわ}流域一帯に祀られている神で、地域開拓神にして水神として尊崇されている。

この地主神社には、重文文化財の本殿と幣殿と木造の国常立尊坐像などがある。春日造りの本殿と幣殿は室町時代の建造であるらしい。重要文化財に指定されているだけあって、確かに本殿は立派で、春日造りの形も珍しい形態だ。本殿前で祓詞奏上。そして石笛と法螺貝の奉奏。

北嶺山（安曇山）明王院は相応（八三一―九一八）の開いたお寺とされる。本尊は千手観音で、近畿三十六不動尊霊場の第二十七番札所でもある。不動明王は護摩焚きと滝行の本尊であり守護尊でもある。一〇世紀頃に成立した相応の伝記の『天台南山無動寺建立和尚伝』や鎌倉前期に成立したという『葛川縁起』には、貞観元年（八五九年）に相応が明王院を開基したという。『葛川縁起』では、地主神の思古淵神に修行の場を与えられて、比良山中の三の滝で断食修行と滝行を試み、満願の日に正身の不動明王を感得し、滝壺に飛び込んで桂の古木を得、それに千手観音を刻んで本尊としたという。

これが歴史的事実かどうかは定かではないが、伝承では比叡山の千日回峰行は三代天台座主円仁の弟子の相応から始まるとされている。とりわけこの葛川の三の滝は不動明王感得の霊地とされ、今なお七月一六日から二〇日までの五日間「夏安居^{げあんご}」と呼ばれる相応の修行にちなんだ断食修行と滝行が行われ、回峰行の一環としてとりわけ重要視されている。

三宝橋を渡ってそのまま進むと、比良山のピークの武奈ヶ岳（一二一四・四メートル）に至る登山道があり、右手に明王院の護摩堂と本堂がある。本堂に入って、般若心経一卷と不動明王の真言を唱え、石笛と法螺貝奉奏する。由緒ある絵馬や額がいくつもかけられ、暗い堂宇の中から明るい外の目に沁みる緑が鮮やかに見てとれる。

この闇と光のコントラスト。比叡山延暦寺の根本中堂でも強く感じたが、天台の寺は闇が深く、そのために世界を深く大きく覗き込んでいるような宇宙的な感覚に陥る。根本中堂など、まるで宇宙空間を航行している宇宙船の中にいるかのようなのだが、この明王院も同じコズミックな感覚が張り巡らされている。それが、相応和尚

の体験に基づくものかどうかはわからないが、しかし、天台修験である回峰行の精神がこのような陰影の深い堂宇を作り上げたことは間違いないだろう。

歩いて三の滝に向かう。明王院から三〇分ほど歩くと、三の滝への降り口がある。そこに看板がかかっている。「比叡山回峰行の開祖相応和尚が入峰し正身の不動明王を感得した」とあった。歩道からつづれ折りの急斜面を降りて沢に出る。途中で三の滝がよく見えた。

沢に降りると、三の滝まで意外に距離がある。白禪一丁になり、法螺貝を吹き、二拝二拍手一拝をして、岩場を縫って、沢を渡って、一人で滝場に近づく。近づく、爆風と共に水飛沫が飛び散っている。結構激しい流れだ。滝壺もまずまず大きく、かなり深そうだ。もちろん、背は立たない。泳いで、滝に近づく。滝場の手前に岩場があるので、まずはそこに乗り上げ、滝の裏に回ろうとする。とてもじゃないが、この爆風と飛沫では正面からは入れない。跳ね返されるだけだ。手前の岩場から滝の裏側に入り込んだ。



三の滝の中の裏に入る

そこには、程よい岩場があって、すわって印を切ることも、合掌することもできる。そこで、般若心経一巻を唱える。そしてそこから滝に打たれようと滝飛沫の中に頭を突っ込むと、あっという間に滝に押し流された。一瞬のことで、エエッーと驚くほどの瞬時のことだった。足場は急に深くなっており危ない。流れも速くすぐに押し流される。滝壺を泳いで廻り込み、また元の位置の滝の手前の岩場に戻り、最初と同じように滝の裏に潜り込み、そこでしばらくいてから、こんどは慎重にゆっくりと滝の本流に頭を晒すが、またまた一挙に押し出されるようにして流された。

もう一度、三度目の正直で岩場に戻り、滝の裏に入る。そして座って、下の岩場を手で掴んで体を安定させて、浦から滝に入っていくが、やはりその場に長くどまることができない。押し流されてしまう。綱かロープで体を支えない限り、この岩場で滝に打たれ続けることはできないだろう。

相応和尚はここで「正身の不動明王」を感得したというが、わたしは三度も滝の中に突撃しながらどのような「正身」をも感得することができなかった。

滝行を終えて坂を上り、林道に出てすぐ「参瀧源水処 覚照水」と「仏光普照」と石碑と看板のある水場があり、水をいただく。冷たくておいしい。

そしていよいよ沢登りのスタート地点に立った。沢登り用の衣服に着替えて、沢登りを開始する。ヘルメットも被る。小林さんは手慣れたもので、ずんずん沢の中をじゃぶじゃぶ渡り、歩き、這い登る。

次々に展開する滝のパノラマと、滝を受けながら登っていく爽快感は「鯉登り」のように爽快であり、痛快であった。何キロ歩いたろうか。途中で一度休憩し、オニギリ四個を食べ、ソーセージを丸ごと齧り、飲み物を飲み、腹ごしらえをした。そして、また沢登りを継続。執着点に着いたのが、二時過ぎだった。一〇時過ぎから沢登りを始めて約四時間弱。時には腰や胸まで水に浸かりながら、滝越えしていくのだ。何か、滝越えサーフィンをしているような気分になった。

出発地点と終着地点で挨拶と感謝の法螺貝を立てる。地主神、不動明王、観音菩薩。相応和尚に感謝。初めて念願の相応和尚の修行の滝場に入ることができた。有難い。山を下りて、明王院と地主神社のところに帰りながら、心は次の沢登りと滝めぐりに心を馳せていた。

比叡山も比良山も凄い。このような修行と思想の練磨を図り、「身心変容技法」の新しい方法論と思想化を生み出したのだから。現代のような「乱世」にその伝統的な身体知を新たに甦らせて息を吹き込むことができたなら、世直しと心直しの道を練り上げることができたなら、と思った。初めての比良山沢登りと滝行と滝巡りを通して、相応上人と天台の思想と実践の偉大さを改めて深く感得したのであった。

八月一八日、砦を七時半に出て、高野川沿いの修学院駅の京都バスのバス停に向かった。七時五四分、修学院橋発の朽木行京都バスに乗って、滋賀県大津市坊村で降りて一人で葛川明王院に行こうとしたのである。明王院で、千日回峰行者の行満大阿闍梨の藤波源信師が護摩を焚くので、それに参列し、十一月に京都大学で行なう予定の「大荒行シンポジウム」の出演依頼をしようと考えたわけである。

ところが、その京都バスは季節限定（冬季運休）の土日（週末）と八月のお盆三ヶ日（八月一四～一六日）しか運行しかしておらず、八月一八日の月曜日の平日はもちろん休みである。のっけから予定が狂った。ともかくバスを二〇分待って、京都バス終点である大原まで行き、そこから滋賀県行きのバスが出ているかもしれないと思ったが、終点で降りて周りを見渡しても何もない。滋賀県の朽木方面に行くバスもない。

そこでタクシーを呼んで大津市坊村の明王院まで行こうとしたのだが、途中で大雨で道田土砂崩れになっているのか、通行止めになっていた。どうやら中村橋のところが崩れているらしい。そこでやむなくタクシーを降りて徒歩で坊村に向かった。



抉られた川底

安曇川の川底が深く抉れている。警戒水位を超える大洪水だったのだろう。流木も群れをなしている。



流木群

タクシーを降りて二キロほども歩いたろうか。明王院隣の地主神社の鳥居が見えてきた。さまざまなアクシデントに見舞われはしたけれど、ようやくと到着。まずは地主神社参拝といこう。



地主神社の鳥居

滋賀県教育委員会の看板には、確かに、貞観元年（八五九年）に千日回峰行を創始したとされる「相応和尚」が創建、祭神は「思古淵大明神」と書いてあった。「思古淵」とは、「シコ＝滝の流れで激しく流れ落ちる川の淵」を意味するのだろう。地形をそのまま表すとてもいい名前である。古代人の自然崇拜・自然畏怖の感覚がよく表れている。そこに、古人の「生態智」がある。何と云っても、土地のヌシの神様なのだ。相応和尚を受け入れた水の神様、滝の、川の、淵の神様である。



地主神社本殿（重要文化財）

だが、明王院に到着して最初に目にしたのは「本日の護摩中止」の案内だった。次々にスケジュールが狂っていく。面白いほどに狂って笑えた。本堂に上がって般若心経一卷読経。不動明王、観音菩薩、毘沙門天、相応和尚（建立大師）の真言を唱え、石笛と横笛と法螺貝を奉奏。

回峰行者は、夏安居の四日目に、高さ一二メートルほどの岩の上から滝壺に飛び込むという。その前、夏安居の中日の七月一八日の夜「太鼓まわし」の行事が行われる。それは滝の中に出てきた桂の流木のうねるさまを表わしているともいう。そして、行者たちは太鼓に飛び乗り、また飛び降りる。そしてその翌日の七月一九日に、相応和尚に倣って滝壺に飛び降りるのである。



白蛇のような三の滝



飛沫を上げる三の滝

八月三日の時は、小林さんが見守ってくれたが、今日はたった一人だ。しかも、この前的大雨で増水している。かなり激しい激流で、危険だ。これでは滝の中に入ることができないかもしれない。が、実践あるのみと、二拝二拍手一拝の後、法螺貝を奉奏して、鳥船行事も省いて、滝場に近づく。白禪一丁で、蟬のように、濡れた岩にしがみつきながら。

激流が足元を攫いに来る。ちょっとでも巻き込まれると溺死体になる可能性は高い。慎重に注意深くロッククライミングのように岩場を伝って滝の方に近づく。が、どうしても川を渡って滝場に近づくことができない。物凄い流れで何度も跳ね飛ばされそうになるのだ。物凄い水量で押し流され、撥ね返されて本流にはとてもとても近づけない。一つ下の急流の小さな滝に身を晒し、一〇分ほど滝川に入り、格闘した末に、いのちからがら生還。帰りの岩伝いの方が怖かった。手足の置き所が変わるので、一つ間違えると激流に瞬時に持って行かれるから。滝場の決死圏であった。

滝行を終え、再度報恩感謝の法螺貝奉奏。二拝二拍手一拝。ここには、恐ろしいほどの「自然畏怖」と「生態智」がある。

2キロほど山道を下り、明王院に戻り、寺務所に向かう。行満大阿闍梨の藤波源信師とは天河大辨財天社で一度お会いしたことがある。

昨今の自然災害の大きさに改めて驚き、ため息をついた。もうずっと前からこのようになることがわかっていたのに、準備しきれていない。覚悟はしていたが、準備はまだまだだ。これからも、自然災害は頻繁にやってくる。それに備えていかなければならない。そしてその中で生き抜かなければならない。人と人が争っている場合などではないのだ。大変な事態と時代を迎えているのだ。第二の「末法の世」「乱世」を。その中を生き抜く。新たな「モノ学・感覚価値」や「身心変容技法」を再確認し再獲得し再編成しながら。その役割をきっちり果たす。

「日本の四大荒行」とも呼べる荒行拠点の実践者の4人を京都に招いて、研究者と共に「荒行（修行）」についての学術的研鑽を行ないたい。招待したい4人は、天台宗千日回峰行行満大阿闍梨・横川飯室不動堂長寿院住職・藤波源信師、大峯金峯山修験本宗宗務総長・金峯山寺執行長：田中利典師、羽黒修験道松聖・所司役・大先達星野尚文師、日蓮宗大荒行堂遠壽院住職・傳師：戸田日晨師の四方である。

が、二度の千日回峰行を達成した酒井雄哉師の後を継いで長寿院の住職に就任して大変忙しいので難しいと断られ、他の回峰行者の方を紹介された。残念ではあるが、別の機会があるだろう。今日はすべての予定が狂いに狂ったが、こんな「物狂い」の時にこそ、あまりにおもろい「開放行」ができた。おもろく、愉快で、楽しく、幸せだった。近年味わったことがないほどの「し・あ・わ・せ」を堪能し体験した。ありがたや、南無不動明王、南無相応和尚建立大師！

5、伊崎寺

このような観点からわたしも「在家の修行」として「東山修験道」を行じているのだが、さる10月5日、琵琶湖修験道を辿ってみたいと修学院から近江八幡に向かった。まず、西国三十三所三十一番札所で日本百観音の一つにも数えられる長命寺に赴く。

姨綺耶山（いきやさん）長命寺は天台宗の寺院で、聖徳太子が開基とされる。琵琶湖畔に面し、本尊は、聖徳太子が造ったと伝えられる十一面観音像である。

この長命寺からさらにバスで10分ほど行ったところに堀切港がある。この堀切港から沖島に渡れる。「沖島」という地名からすると、もともと島自体が聖地化されてきたところだろう。



たとえば、九州の宗像大社の奥宮のある「沖ノ島」がそうだ。「沖ノ島」とは「奥の島」、この世の果てのあの世と通じている奥島の意味だから。実際ここに「奥島山」という地名がある。

この堀切港バス停で降りて、標高210・4メートルの伊崎山の中を歩いて尾根道伝いに伊崎寺に向かう。山中には「伊崎国有林カワウと人の共生の森」を謳った看板があった。ここにはカワウの大規模コロニーがあるのだ。それを「共生・棲み分け・ゾーニング」という。今西錦司が着眼したこの「棲み分け」概念も再検討が必要。これから重要な概念となるだろう。無理な「強制的共生」ではなく「棲み分け的共生」のヒントとして。

伊崎山は蜘蛛の巣だらけだった。人があまり入らないのかクモのメッカなのか、頭から上半身何度も何度もクモの巣に取り巻かれ「スパイダーマン」と化す。なかなか野性的な森だ。三〇分ほど歩いて山頂付近に近づくと墓地があった。



伊崎山の墓地

比叡山山中でもよく見かける墓石の形から、これは歴代住職たちのお墓に違いないと推測した。般若心経一巻と不動明王の真言を唱え法螺貝奉奏。お墓の後ろに回って墓石に彫られた碑文を確認する。「惣一和尚法印」とか、「権大僧都大阿闍梨法印」とか、「権大僧都法印亮観大和尚」とかとある。「大阿闍梨」とあるのは間違いなく回峰行者でもあった僧侶であろう。

5度目ほどの山道の分岐点を過ぎると、終に参道と合流し、念願の伊崎寺だ。しばらく行くと本堂が見えた。本尊は回峰行者が一体化されるという不動明王である。



伊崎寺本堂

本堂手前にお稲荷さんが祀られている。湖に突き出た棹の上からの飛び込みの行で知られている「棹飛堂」に回る。その手前に「地主神社」があった。「地主」の神とは「伊崎明神」、湖の神様であろう。

この伊崎寺の HP には次のように由緒が説明されている。「伊崎寺は山号を『娵倚耶山』といい、近隣にある西国三十三所札所である長命寺と同じ山号です。長命寺から連なる山系上に立地しています。伝承では奈良時代、修験道の開祖とされる役行者がここを最初に見つけられて行場としたといわれています。その折、イノシシが役行者をこの地に導いたということから「猪先（いさき）」という名になったと伝えられています。その後、貞観年間（859～876）に相応和尚が寺院を創建、自作の不動明王を安置されました。所蔵されている仏像などから、伊崎寺は平安時代後期には存在したと推定されていますが、天台修験の拠点となったのは鎌倉時代以後と推測されています。＞

ここで重要なのは、役行者が「行場」にしたという点と猪が役行者を導いたと説明されている点である。ここで回峰行者が行なう「棹飛び」については、「伊崎寺で毎年8月1日の千日会に行われる棹飛びは、水面から数メートルの高さに突き出した棹の突端から琵琶湖へと飛び降りる雄壮な行事です。長きにわたって地域の人々から親しまれているのはもちろん、全国的にも知られ、伊崎寺の代名詞ともいえます。伝承では1000年近く続いていたといわれており、文献的にも16世紀にはすでに行われていたことが確認されています。」「一人の行者が棹の先端まで歩き湖に飛び込むというのは、『捨身の行』、つまり報恩や他者救済のため、自らを犠牲にして仏道を求める修行の姿です。行者は人々のさまざまな願いを背負っています。棹というのはいわば「人生」、行者は多くの願いを背負いながら先まで歩き、自分の身よりも人々の願いのためにわが身を捨ててそこから飛び込み、そしてまた陸に帰る＝生まれ変わります。この行は『再生』の意味合いも持っているのです。同じような『再生』の考え方は比叡山の回峰行にもあります。比叡山の東塔は現在、西塔は過去、横川は未来、そして坂本の日吉大社をお参りして、再び山へ戻る＝再生するのです。そうした行者の『行』としての意味合いも『棹飛び』にはあります。」と説明される。修験道の奥義はしばしば「擬死再生」と言われるが、「棹飛び」も代受苦的な「捨身行」であり、「再生」の意味を持っているというのである。



「棹飛堂」の棹

琵琶湖は確かに「うみ」と呼ばれてきたほどに大きい。この地に佇むと、その気持ちがよくわかる。まさに海である。そう感じる。奥＝沖が深い。それが「沖島」＝「奥島」にもなっているのだ。琵琶湖があちらに通じているという感覚が古代からずっと続いていた。近江に住んでいる人たちはそのことをよく知っていた。近江の人最澄もそのことをよく知っていたから、東に琵琶湖を望む比叡山の東側の山頂に一乗止観院（延暦寺）を創ったのだろう。琵琶湖と叡山なしに延暦寺はなく天台回峰行もない。そのことを身を以て知ったことが今回の伊崎寺訪問の大きな収穫であった。

6、東山修験道

起源 延暦十三年（西暦七九四年）十一月八日、桓武天皇は「山背国」を「山城国」に改名する詔を出し「平安京」に遷都した。そのことが、『日本紀略』に、「此国山河襟帶、自然作城。因斯勝、可制新号。宜改山背国、

為山城国。又子来之民、謳歌之輩、異口同辞、号曰平安京。（この国、山河襟帯、自然に城を作す。この形勝によりて新号を制すべし。よろしく山背国を改め山城国となすべし。また子来の民、謳歌の輩、異口同辞し、平安京と号す。）と『日本紀略』に記されている。ここに示されているように、京都盆地の三山の「山」は「襟」のように立っており、賀茂川や桂川などの「川」は「帯」のように優雅に流れている。この地は、陽＝山＝男性性と陰＝河＝女性性との見事なバランスが体现されており、風水から見ても「四神相応」の吉祥の地であった。この「景勝」地を一目見て、桓武天皇はそれが自然の「山城」と思い、そこにこそ「平安」の「京」が建設されるという期待と祈りを込めたのである。

この地に、大山咋神（おおやまくいのかみ、日吉大社と松尾大社の祭神）が祀られ、最澄によって開かれた「一乗止観院」（後に「延暦寺」と改称）には本尊として薬師如来が安置された。そこは御所の北東すなわち鬼門の位置に当たり、「皇城镇護」の霊峰・寺院とされた。その最澄の教統に相応が出て、回峰行を始め、「天台千日回峰行」として編成されていく。その京都大回りの拠点となったのが、赤山禅院である。

この「千日回峰行」とは、「百日回峰」を終えた者の中で特別に発願し認められた行者が、まず最初の三年間は一年に百日間ずつ（通算三百日）定められた二百六十ヶ所ほどの拝所を一日三〇キロのペースで回峰する。四年目と五年目は、一日三〇キロを二百日間ずつ（通算七百日）回峰する。

こうして、五年間で通算七百日間の回峰の行を終えた行者は、東に琵琶湖を見渡せる眺めのよい比叡山中無動寺谷の明王堂で「堂入り」と呼ばれる凄絶な行を行う。九日間にわたり断食・断水を敢行する籠りの行である。しかもその間、不眠・不臥で、間断なく不動明王の真言を十万回唱える荒行中の荒行である。

そして六年目、「堂入り」を終えて「行満阿闍梨」を名乗ることを許された回峰行者が、比叡山から雲母坂を通ってここ赤山禅院（赤山明神）にお参りして献花するのが「赤山苦行」と称する百日荒行の段階である。一日三〇キロに、さらに赤山禅院への往復が加わった、一日六〇キロの行程を百日間回峰する。これで通算八百日である。

七年目は、前半の百日間は、赤山禅院からさらに京都市内を巡礼する一日八四キロの「京都大廻り」の回峰を行じ、後半の最後の百日間で最初の一〇三キロの行程を巡る。これで千日におよぶ回峰行が完結する。

そもそも延暦七年（七八八年）に「一乗止観院」を開創した最澄は、『山家学生式』の中で、「国宝何物 宝道心也 有道心人 名為国宝……照干一隅 此則国宝（国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす…一隅を照らす、此れ則ち国宝なり）」と宣言し、一乗止観院＝延暦寺を国宝養成機関と定位した。

つまり、「道心」こそが本当の「宝」で、その「道心」を持って「一隅を照らす」生き方をする人こそが「国宝」だとし、「道心」を持って、十二年もの間、山にとどまり一心不乱に修行することを「国宝」への道と義務づけた。この教育方針が、後に栄西や法然、親鸞、道元、日蓮などの鎌倉新仏教の創始者たちをはじめとする、一隅を照らす「国宝」を育て、それによって比叡山延暦寺は世界に冠たる道心と学道の府となっていく。

延暦寺拡充の過程で、平安京を守護する霊的装置としての赤山禅院は、仁和四年（八八八年）、最澄の弟子の円仁によって建立され、御神体の赤山明神は毘沙門天に似た武将を象る神像で延命富貴の神とされて信仰され、都の「表鬼門」に当たるために、方除けの神としても崇敬された。

日本天台宗は法華経ばかりではなく、台密と呼ばれる天台密教を内包し、その密教は赤山明神や三井寺の新羅明神などの道教的要素や、天台宗の儀式である玄旨帰命壇の本尊で念仏の守護神とされる摩多羅神などの怪異な異神を含んでいる。赤山明神は天台密教の「密」の部分を支える「霊的防衛拠点」である。

赤山禅院拝殿中央の屋根の上の御幣と鈴を持った陶製の猿の像は、魔除けや悪霊封じの意味も持ち、御所の東北角の猿ヶ辻の猿と対応している猿は鬼門の神・金神の表象とも、また日吉大社の神使ともされていて、比叡山とは縁が深い動物である。

この天台密教はやがて「草木国土悉皆成仏」を命題とする「天台本覚思想」を生み出し、衆生すなわち生命あ

るものは、みな悟りを開いていると主張した。それは空海が提唱した「即身成仏」論をさらに徹底した成仏論であった。

比叡山西麓にある赤山禅院は「天台宗修験道」を名乗り、「東山三十六峰」の第八峰瓜生山に奥の院を持つ狸谷山不動院は「真言宗修験道大本山」を名乗っている。

さて、時は下って、この赤山禅院と狸谷山不動院の間にある門跡寺院曼殊院（天台宗五大門跡寺院の一つ）下で、二〇〇七年一〇月より鎌田東二が始めた現代修験道が「東山修験道」である。「東山修験道」とは、「東山三十六峰」と呼ばれる京都東山連峰を「歩行」^{ほぎょう}修行の地として巡り歩き、そこから得られる神仏の力動、言い換えると、自然智・自然力を探究し、感受し、みずからの「生態学的身体知」を鍛え上げ、その知覚と促しによって生きていこうとする道の実践である。二〇〇七年、鎌田は天河大辨財天社での体験と国内外の聖地巡礼の経験に基づいて、「東山修験道研究所」を立ち上げ、一人でその実践を始めた。

「東山」とは京都盆地の東側にある連峰を指し、総称して「東山三十六峰」と呼ぶ。北は天台宗の総本山延暦寺のある比叡山から、南は全国に三万社を数える稻荷神社の総本社・伏見稻荷大社のある稻荷山までの連峰。標高は比叡山の八四八メートルが最高峰で、大文字焼きをする如意ヶ嶽（大文字山）が四六六メートルと、それほど高くはないが、しかしその峰々、谷々の起伏の多い地形は迷路のように入りこんでいて、絶妙の奥深さをもっており、歩行者にとって飽きることがない。

これによって、自己の内に眠る「野生ソフト」「縄文モード」を目覚めさせる。自然を畏怖し、讃仰する。「身一つ」になることで、おのれの「身の丈」を思い知り、この「身一つ」で何ができ、できないかをはっきりと掴むことで、自然界の中の人間の位置、自己の位置を知り、謙虚に生き、「生態智」（「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵と技法」）を掴み、実践・体現することを目標とする。

東山三十六峰 江戸時代には「東山三十六峰」と呼ばれるようになる。北嶺の比叡山から見ていくと、1 比叡山、2 御生山（御蔭山）、3 赤山、4 修学院山、5 葉山、6 一乗寺山、7 茶山、8 瓜生山、9 北白川山、10 月待山、11 如意ヶ岳（大文字山）、12 吉田山、13 紫雲山、14 善気山、15 椿ヶ峰、16 若王子山、17 南禅寺山、18 大日山（東岩蔵山）、19 神明山、20 栗田山、21 華頂山（知恩院山）、22 円山、23 長楽寺山、24 双林寺山、25 東大谷山、26 高台寺山、27 霊山、28 鳥辺山、29 清水山、30 清閑寺山、31 阿弥陀ヶ峰、32 今熊野山、33 泉山（月輪山）、34 恵日山、35 光明峰、36 稻荷山、となる。

この「東山三十六峰」の麓に、北から、三千院、八瀬天満宮、御蔭神社、赤山禅院、曼殊院、八大神社、詩仙堂、圓光寺、慈照寺（銀閣寺）、吉田神社、法然院、永観堂、南禅寺、日向大神宮、知恩院、八坂神社、建仁寺、高台寺、京都霊山護国神社、清水寺、大谷本廟（親鸞聖人の墓）、妙法院、智積院、蓮華王院（三十三間堂）、泉涌寺、東福寺、伏見稻荷大社など、平安京・京都を代表する重要寺社が薈を並べている。とすれば、東山連峰は日本の神仏の一大密集地であり、聖地文化の集蔵地である。

修行法 ①地図を持たない。②懐中電灯を持たないで夜中の山中を歩く（そのことによって、自分の無力と小ささを思い知り、宇宙と地球の中での自己の立ち位置をリアルな身体性を以って把握する）。③可能な限り「身心無一物」で臨む（本当は裸形で行じたいが違法行為なので無理である）。④その前提として、「お山＝比叡山」を神仏の座所とし、毎朝三十分ほどの東山修験道勤行次第を務める。その次第は、大祓詞・祓詞奏上、古事記神名二十柱奉唱。所縁神名五十柱奉唱。諸仏三尊奉唱。所縁人名五十名奉唱。低音音霊。般若心経読誦。各種真言奉唱。石笛八種奉奏。横笛五種奉奏（「産霊」「心月」など）。縦笛奉奏。土笛四種奉奏。法螺貝二種（日本・チベット）奉奏。神楽鈴・チベット鈴奉振。ハーモニカ奉奏（「ふるさと」「野ばら」など）。太鼓奉奏。

拝所 森の魚君、森の妖怪君、堰滝、森のモアイ君、お地蔵様、つつじヶ丘のお地蔵様、水井山、比良山、琵琶湖などの拝所があり、雲母坂コース、曼殊院～無動寺弁天堂・明王院コースなど複数のコースがある。

つつじヶ丘での儀式 歩行においては極力儀式化を避けるが、読経と各種真言と六方拝と天地人に捧げるバク転三回を最小限の儀式とする。

補記 ＊本科研の研究代表者の鎌田は、2006 年以降 4 年間、科研「モノ学の構築—もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」を実施し、日本文明を作り上げてきた想像力—創造力の基底をなす「モノ」認識を原理的かつ事例的に研究し、その成果を研究誌『モノ学・感覚価値研究』（通算 4 号）、鎌田東二編『モノ学の冒険』（創元社、2009 年）、同編『モノ学・感覚価値論』（晃洋書房、2010 年）に発表し、次の段階として、「物・者・霊」の三層の意味世界を包含する日本人の「モノ」観や感覚価値論をより具体的な身体技法と結びつけることで「心と体とモノをつなぐワザ」としての「身心変容技法」、つまり身心問題の本質構造と応用事例を明らかにし、身心理論に基づくより実践的な応用可能性を開くことを企図した。これまで、宗教学や人類学の領域では行や身体技法の問題が議論されてきた。古くはマルセル・モースの身体技法論や岸本英夫の行研究や近年では湯浅泰雄の身体論などがある。それらは多く、社会学や宗教類型論や身体思想として議論されたが、わたしも宗教的身体論として『身体宇宙誌』（講談社学術文庫、1994 年）を上梓している。本研究では、これまでのフィールド研究や文献思想研究を踏まえて考察するとともに、最新の臨床心理学や精神医学の臨床研究や認知科学や脳神経科学の実験研究と結びつけることにより、また身体と心との相互的な関わりをワザやモノを媒介としつつ具体的に分析することを通して「心の荒廃の時代」を突破する理論と実践を提示することを企図している。そして、①「身心変容技法」の概念規定（定義）とその諸相（個性的表現）の解明（主に文献思想研究）、②異なる「身心変容技法」間の構造的比較：A 禅や密教や神道行法等における身心変容技法の神経基盤の探求（実験研究）、B「身心変容技法」の質的調査（フィールド研究・臨床研究）、③人間の「声」と「意識変容体験」の解明と、「身心変容技法」を日常生活につなげていく回路の探究：古来、人間の「声」を使った瞑想法が諸宗教の伝統において継承されてきた。日本仏教における声明、真言、題目、念仏などがその典型例であるが、キリスト教のグレゴリウス讃歌、イスラームのズィクル（神名「アッラ」一の連呼）なども「声（念唱）」と深い関わりがある。町田宗鳳は近年一般市民と「ありがとう」を朗誦する「感謝念仏」を実践しているが、そこで一種の神秘的験をもつ者が少なくない。体験者の性別、年齢、心理傾向などに留意しながら、朗誦中の脳内活動と意識変容過程を fMRI などを用いた科学的手法で計測し、また集中型瞑想、洞察型瞑想、イメージ誘導などを遂行中の脳画像を撮って分析し、「身心変容技法」と宗教体験に新たな光を当て、悟りや神仏に出会う体験を日常生活につなげてゆく回路構築を探る。「身心変容技法」は宗教的伝統とリソースに蓄えられたソフトウェアであり、その「身体知」を科学的に解明すると同時に、哲学・思想史的に位置付け直すところに本研究の特色と独創がある。この「身体知」の総合的研究は、21 世紀の「心の平安」をデザインしていく際に実践的かつ具体的な示唆を与え、人間関係の改善や健康回復にも寄与し、個性と自由を担保した心直しの一助となるものと確信している。

＊『法華経』二十八品の構成は次の通り。第一序品、第二方便品、第三譬喻品、第四信解品、第五薬草喻品、第六授記品、第七化城喻品、第八五百弟子受記品、第九授学無学人記品、第十法師品、第十一見宝塔品、第十二提婆達多品、第十三勧持品、第十四安楽行品（以上前半部が「迹門」とされる）、第十五從地湧出品、第十六如来寿量品、第十七分別功德品、第十八随喜功德品、第十九法師功德品、第二十常不輕菩薩品、第二十一如来神力品、第二十二嘱累品、第二十三薬王菩薩本事品、第二十四妙音菩薩品、第二十五觀世音菩薩普門品、第二十六陀羅尼品、第二十七妙莊嚴王本事品、第二十八普賢菩薩勧発品（以上後半部が「本門」とされる）。中でも、「第二方便品」「第十六如来寿量品」、「第二十常不輕菩薩品」、「第二十五觀世音菩薩」（特に「觀音經」と呼ばれ、よく読誦される）は重要。